

特別講義

「聖書が教える命の大切さ」

「隣人になる」とは？

「小さな命を守る会」代表・牧師・教育学博士

辻岡健象師



「隣人になる」とは（ルカ10章30-37節より）

強盗に襲われ、半殺しにされた人がいました。祭司とレビ人が通りかかりますが、わざと見ないふりをして行きました。関わることを拒んだのです。ところが、一人のサマリヤ人が、彼をかわいそうに思って、具体的に世話をします。イエス様はこの三人の中で、誰がその人の隣人になるかと言われました。この「なる」というのがこの物語の鍵です。近くにいるから隣人になるのではなく、その人に愛を注ぎ、憐れみをかける時に、隣人になります。イエス様は、あなたも行って同じようにしなさいと言われました。愛というのは、「名詞ではなく、動詞」、「知識ではなく行い」とよく言われます。極端に言うと、愛するために隣人がいるということです。その隣人が困っている時、愛は待ちません。待てません。すぐそれをしないと自分が災いときえと思うような燃えるものです。最も小さいものに対しても愛は必要です。ある時、中絶を行っていたある産婦人科医は、イエス様が、「最も小さい者にしたのは、わたしにしたのと同じである」と言われたのを聞いた時、最も小さい者とは誰かと考えました。大人と子どもであれば子ども。子どもの中で最も小さいのは、赤ちゃん。赤ちゃんの中でも小さいのはお腹の中の赤ちゃん。お腹の中の赤ちゃんの中でも最も小さいのが中絶されていく赤ちゃんだと気づきました。実は彼は何千何万という赤ちゃんを中絶してきたのですが、この聖書の言葉を聞いて小さなイエス様を殺してきたことを悔い改め、今度は助ける側に回ると言いました。

日本における中絶の現状

現在、医師が厚生労働省に、中絶を行なったという報告を出すのは、約30-40万件です。命を守るはずのお医者さんが、私はこれだけ殺しましたと報告しています。しかし、これは届出の数で、未届出も合わせたら、最低300万件にはなると言われています。300万人前後だとすると、一日に1万人近い数、十秒に一人という計算になります。これが現状です。日本は1948年、世界に先駆けて優生保護法（お腹の中の赤ちゃんを殺してもよい）という法律を作りました。世界では、日本が殺人法を制定したと言って驚きましたが、その後、カトリックの国の一部を除いて各国も真似ました。うっかりすると、私達クリスチャンも神様が造られた命を、人間が作った法律に惑わされて、中絶はいいでしょうと言ってしまいかねません。これは「殺してはならない」と言われた神様の教えに逆行していますから、私たちは信仰生活や伝道、交わりの中でそのことを伝えていかなければなりません。私たちはサマリヤ人となって愛を注いで助けていく。それが今現代のクリスチャンの生き方だと思います。イエス様ご自身も神から人になられ、このサマリヤ人のようになっていろいろな人のところへ行かれ、苦しみ悩み滅びに向かう私達のもとにも来てくださいました。イエス様が私達のために死なれ、ご自分の死によって滅びから永遠のいのちへと導いてくださいました。だから、「あなたも同じようにしなさい」と声をかけられています。